安心な人の輪 広がるか

幼いころから、なんだかサル、霊長類が好きだった。小学生のとき、犬山のモンキーセンター友の会に入ったこともある。何回もレポートに書いたが、東山動物園に行っても、最初に向かうのは霊長類コーナーだ。ゴリラもいいが、オランウ―タンが好きだ。そんなわけでもないが、朝日新聞 11 月 11 日朝刊の山極寿一京都大総長の「科学季評」に目がとまった。霊長類のことだけでなく、AI による情報通信革命についての鋭い指摘に示唆をうけたので紹介しておきたい。

情報通信技術の発展は、この人口規模の急速な拡大に伴うものである。時間と距離を無視して多くの人々と交信でき、膨大な量のデータを瞬時に解析して的確な情報を送り続ける技術があるからこそ、私たちは人と物があふれる現代社会に生きていける。だが、これらの技術は多くの人々をつなぐ役割を果たし切れているだろうか。

言葉は見えないものを表し、別々のものを一つにまとめる。持ち運び可能で効率的なコミュニケーションである。言葉は人間が広く分散しながらも、情報を交換し合いながら信頼できるつながりを保つ仕組みだった。でも、信頼関係は言葉だけでは紡げない。他の霊長類と同じように、人間は五感を用いて他者とつながり合う。共有しやすい視覚や聴覚ではなく、嗅覚、味覚、触覚のほうが信頼を高めることに役立つ。脳を大きくした人類は言葉によって視覚と聴覚を広げて情報世界を広げ、他の五感によって信頼関係を保持してきたのではないかと思う。

近年、ネットやスマホで得られる視覚、聴覚情報は格段に増えた。センサー技術も進み、人間の五感を超える分析が可能になった。しかし、人間はまだこうした技術を使って、信頼する仲間の数を増やせないでいる。100 万人を超える都市に暮らしながら、信頼できる仲間は 150 人を大きく上回ることがない。むしろ、スマホ、フェイスブック、LINE で頻繁に連絡を取り合う仲間の数は減っている。しかも、顔を合わさず連絡を取り合うため、身体感覚でつながることができず。強固な信頼関係をつくれないでいる。

これから AI を用いた情報通信技術は、あらゆる情報をデータにして人のネットワークを密にしていくだろう。それは安全な環境をつくるのに大いに役立つはずだ。だが、現代は安全イコール安心ではない。安心は信頼できる人の輪がもたらすものだからだ。いくら安全な場所にいても、仲間に裏切られればたちまち危機に見舞われる。私たちは今豊かな情報に恵まれながら、個人が孤独で危険に向き合う不安な社会にいるのである。仲間と分かち合う幸せな時間は AI にはつくれない。それは身体に根差したものであり、効率化とは正反対なものだ。それを賢く組み込むような超スマート社会を構想する必要があると私は思う。

（2017 年 11 月 19 日）